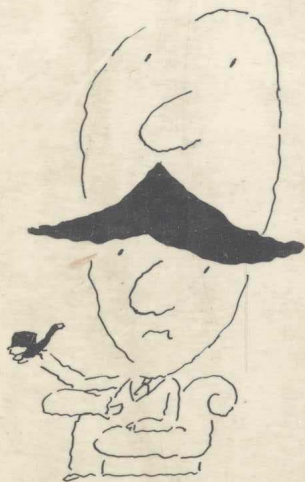


オヤジ学入門

三浦朱門



女房君主制をたおそう!

ヤバンなる母性愛の前に黙すオヤジたちよ!

誇り高きオヤジ復権の道とともに探そう!

オヤジ学入門

三浦朱門



文藝春秋

著者略歴

一九二六年、東京に生まれる。

一九四八年、東京大学文学部言語学科卒業。

一九五〇年、阪田寛夫らと第十五次「新思潮」を創刊、翌年「画鬼」(のち「冥府山水図」と改題)、翌年「斧と馬丁」を発表、作家生活に入る。

一九六七年、「箱庭」で第十四回新潮文学賞受賞。

著書「冥府山水図」「蘊湖」「セルロイドの塔」「箱庭」など

オヤジ学入門

一九七六年五月一日第一刷

著者 三浦朱門

発行者 阿部亥太郎

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三

電話〇三―二六五―一二二一

凸版印刷 中島製本

万一落丁乱丁がありましたらお取替します

© SHUMON MIURA 1976

PRINTED IN JAPAN

オヤジ学入門 目次

ヤバンなる母性愛 7

親の因果が子に報い 31

孤高の喜劇 46

メンデルの法則 61

幼稚園 74

進学・秀才 92

セックスと親 107

学校教育と家庭教育 124

地震・雷・火事・ニヨ―ボ― 139

親と子の別れ 155

父よ、あなたは強かった 169

女房に家事を教えよう 185

女剛球・男変化球 200

イラストレーション 装幀
古川タク 坂田政則

オヤジ学入門

ヤバンなる母性愛

母性愛を崇高なものだと言う人がいるが、あんなものは大したことではない。男だって、自分の体の一部が大きくなって、ガンか何かだと思っていたのに、そこが裂けて子供がでてきたら、それを自分の分身として認めるであらう。

いや、認めるなどといった知的なことではなくて、ビクリしながらも、それを第二の自分だと感ずるはずだ。同時に、コリャ、オカシイ、と思う。男のくせに、子供なんか産んじやって、こんなことを同僚やマスコミに感づかれたら、いい笑い物になってしまう。コッソリ、処分してしまおう。そう考えるに違いない。

最近よくおこる母親の赤ん坊殺しも、昔ながらの盲目的な母性愛も、大体、右の心理によって説明できる。

近ごろのように、性愛と生殖が分離されてくると、性愛は単なる快楽追求手段にすぎない。ゴ

「ゴー踊るのと大した差がないのだから、誰とナニしたって構わないことになる。特別の人とでなければ、というのは、セックスが生殖に結びつく時だけである。」

「この男、トロいから、お腹の子のオヤジに仕立てちゃおう。」

「この男なら、きつと、あたしと、あたしが将来産むであろう子供の保護者になってくれる。」

理由はどうかあろうとも、女が特定の男に白羽の矢を立てる時、男はその女のセックスを自分の専用とし、その女と彼女が産んだ子供の生活を、物心両面において保証するはずだという暗黙の了解事項がある。女は自分の産む子が間違いない、その男の子だと言いはれる根拠と自信をつくるために、ほかの男と交わらない。男の方は別の女とマチガイをおかしては、自分の子を産んでくれた女にとちめられるのだが、マチガイをおかした、と認めることは、別の女との関係は単なる性愛であって、生殖につながるものではない、という主張なのだ。別の女との間に子供ができてしまったら、もう間違いなどではない。その事実を、つまり、第二の女とその子の存在を認めるか、あるいは、その女が産んだ子は、自分の子ではないと、徹底的に拒否するかしかないのである。」

ウンチとガキ

しかし、こういった問題はすべて、男と女がアレをすると、両方の血をひいた子供ができると

いう、生物学的な認識を前提とする。娼婦のようにセックスを生活費を得るための労働と考え、一部の娘や人妻のように、セックスを快楽追求の遊びだ、と考える女たちの腹に子供ができたかどうか。それはいわば性病にかかったようなものである。あるいは、ウマイ、ウマイといって食べた料理が、翌日、ウンチになってしまふことにたとえられようか。中絶するか、それが間にあわなければ、産んで棄てるか、ブリキカンの中にいれて忘れてしまふかのいずれかであろう。ドラムカンに入れて、ガソリンをかけて燃してしまふのもいい。要するに自分の体から出た排泄物だから、トイレにほうりこんで水に流したっていいのだけれど、そんなことをすると、トイレがつまって困るから、焼きすてるのだ。「ホントは、ミノベさんが、そういう産みすて赤ん坊を回収する、ゴミトラックみたいなものを組織化してくれるといいのだけだなあ。」などと思っているかもしれないのである。

小説書きなどはナルシスが多い。たとえば安岡章太郎が二十日間もたまっていたウンチを、やっとの思いで出した時のことを話す時など、たださえ「八の字」を書いている目尻をだらしなくさげて、

「するとだな、お前、ビール瓶みたいなのがとび出してきてだな、便器にあたって、カチーンと音をたてた。」

それを聞いている吉行淳之介、遠藤周作など、これまた安岡に劣らぬナルシス屋だから、

「フーン、ビール瓶くらい大きいの。そりゃ痛かったろう。」

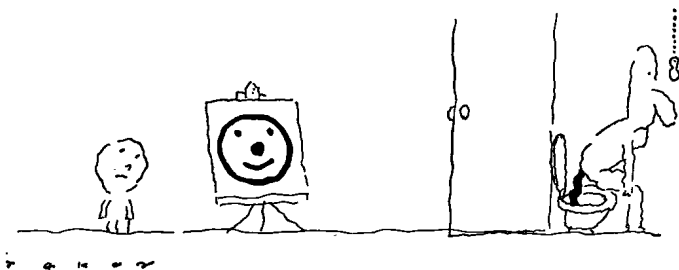
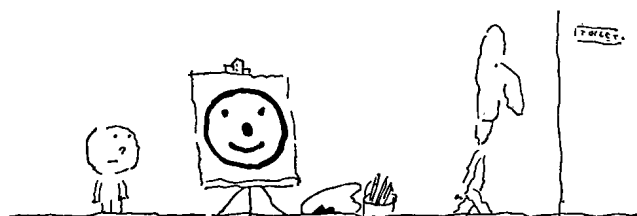
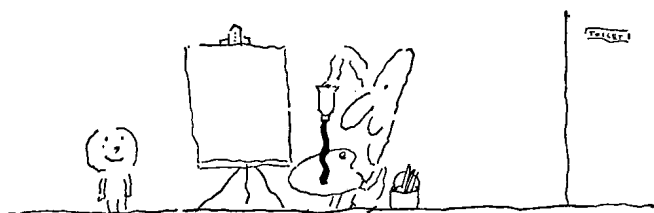
「カチーンと音をたてたのか。そうだろうなあ。二十日も腹の中にあったんじゃ、堅くもなってるさ。」

と感心して相槌をうっては、次に自分のウンチがいかに美的であるか、またトイレの水の上に顔を出すほど大量に出るのだといった自慢話をするのである。顔をしかめてはいけない。女どもの子供自慢は大体、これに類したことなのだ。

「ウチの子、音楽の才能があるらしいのよ。まだ六ヶ月なだけどベートーベン聞かせると、おとなしく寝るの。この間、外出する時、家政婦さんにね、音楽さえ聞かせておけばおとなしいからって言うておいたのに、帰ってくると、むずかって大変だったと言うの。おかしいなあ、と思って、何をかけたの、と聞いたら、都はるみなんですって。はるみちゃんじゃダメなのよ、ウチの子は。」

といった話や、それに相槌をうっては、膝をのり出して、自分の子供の自慢をするのとすこしも変らないのだ。

つまり、自分の赤ん坊を殺すのも、自慢するのも、その心理においては、自分のウンチを、ああ汚ない、と水に流してしまったり、「いや、長いウンチだ。こんな長いウンチをした人間は、アダム以来一人もいないのではないか。」と、ウットリ便器の中をのぞきこむのと、共通の要素



がある。それはワガ物、自分の体から出たもの、という認識である。

ウンチと赤ん坊を比較すると、ウンチしか作れない男の身として残念ながら、赤ん坊の方が格段に高次元の存在であることを認めざるを得ない。ウンチはくさいだけが、赤ん坊はくさいだけでなく、泣くし、動くし、それ自身でウンチまでする。いや、そればかりでない。赤ん坊はそれなりに人間なのである。それだけに自慢のし甲斐も、産んだ後の始末にこまり方も、段違いということになる。

要するに、母親にとって、赤ん坊とは、ごく素直に我が物なのである。煮て食おうと、焼いて食おうと、頬ずりしようと、他人は口出しするな、といった感じのものなのだ。

従って母性愛などというのは、大したものじゃない。母という存在は自分が遊びに行っていて、子供のことを思い出すと、乳腺がはって、乳がしたたる人間だ。それでは年ごろの男が、ふと女のヌードを想像して、性器が充血するのと、すこしも変りはしない。

ただ、多くの芸術、男たちの偉大な事業は性欲の変形だという言い方が正しいなら、女性が家庭において、また社会活動において示すやさしさ、うるおい、下積みの仕事を黙々としかもキメこまかくやる、といった貢献はすべて、母性愛という本能の変形かもしれないのである。考えてみると、これらの特性はすべて、育児にあって、絶対に必要な資質なのである。これはまた同時に学校教育において教えられたことを理解、記憶し、教師の要求——つまり試験——によって、

コピー機械のように完全に再現するのに向いているのである。かつて私は教師をしていたころ、試験のかわりに、レポートの提出を学生に課した。男の学生はレポートを以て、教師がしゃべったことのダイジェストか、自分のデタラメを書くことだと信じているから、こちらとしても、悪い点をつけるのも気楽だった。

ところが女子学生というヤツは、こっちがしゃべったことを、一言一句違えずに再現し、あまつさえ、参考書として指定した本から関係ある部分を、これまた一言一句違えず書きうつしてある。私がしゃべったことは、私としてはウソはないつもりだから、彼女らの書いたことは、全部真実ということになる。しかも、書きもらしたことが一つもないとすると、すべてによい点をあたえるより仕方がないではないか。差をつけるとすれば、内容の配列においてどちらの方が気がきいているか、ということくらいである。

ちなみに私が最高点をつけた娘は、内容において申し分ないのみならず、字も美しく、きれいなラシャ紙で表紙をつけ、それを華やかなリボンで飾ったものであった。それが私の机の上にあるだけで、何だかラブレターをもらったみたいで、ソワソワしてしまい、つついっ満点をつけてしまったのである。

男女共学では、とてもヤロウどもは娘たちに敵わないのはこのためなのである。

征服者の敗北

結婚生活において、何故、男は女に対して、次第に不利な状態に追いこまれてゆくかという、男は女に対して性欲しかないのに、女の方は性欲に加えて母性愛を持っているからである。

近ごろの娘たちは、結婚前から性愛のよろこびを知っている人がふえたというが、まあ、平均的に言って、新婚当時、性欲は男が強く、女はほとんどない。これはたとえて言えば、強力な陸軍を持っている国が、隣国の軍備もろくにない所に攻めこんだようなものである。最初のうちは面白いだけである。敵の産業の中心部を占領して、次に首都をおとし入れる。そして堂々たる入城式を勝利の行進曲と共に挙行する。当初、占領軍はのんきなものだ。その気になれば、政府機関だろうと私企業だろうと、ズカズカ入りこめる。

「占領軍の者だ。」

と言えば、敵は無条件降伏したのだから、おとなしく従う。そのうち、敵の中に性欲という名のゲリラ活動がはじまる。おまけに、占領軍が子供というカイライ政権を作って、ちょっとやそつとで、占領地から手を引けない、という段階になると、母性愛というレジスタンスがはじまる。ゲリラの方は武器を持って、こちらの軍隊と射ちあう。でも、これは武器と武器の関係だから、最初のうちは正規軍であるこちらが有利だ。しかしレジスタンスはこまる。カイライ政府の中に、